

特集 国際社会の
新システムを探る

中ソ和解と日本の立場

変化した中国の世界戦略

国際政治の変動を眺めながら、私の専門である中国内部の動きを基軸に話を進めていきたい。数日前、「中ソ接近」というテーマのテレビ番組に出演中、シュルツ米務長官が訪中に際し、南北朝鮮のクロス承認を中国に提案した、というニュースが入った。早速、司会者から感想を問われたが、どこかおかしいというのが私の直観だった。シュルツ訪中の狙いは台湾問題をめぐって冷え込んでいる米中関係を打開するとともに、中ソの接近のけん制にあるはずだ。ところがそのシュルツ訪中の成果として真っ先に出てきたのが南北朝鮮のクロス承認提案だったとしたら、米中会談がそれほど大きな成果を上げられなかったことの表れとみていい。

その後、しばらくして趙紫陽首相の年内訪米というニュースが入ってきた。私は今年中の趙首相訪米は疑問であり、また、仮に訪米しても米中関係の打開にはつながらまいと思った。趙紫陽首相は中国の重要な意思決定には加わっていない人だからだ。案の定、中国側は趙首相の年内訪米は何も決まっていないと否定してきた。むしろ新華社はアメリカに対し「台湾関係法」の廃棄を強く求めてきている。新聞は当初シュルツ訪中により米中間の懸案が決着をみたという見方を掲げたところが多かったが、その判断は誤っていた。

それはアメリカについてもいえ、アメリカの最近の中国認識は甘いというのが私の感想である。私のように中ソ和解の可能性を考える人はほとんどいない。先日、ケンブリッジ中国史叢

なか じま みね お
中 嶋 嶺 雄

(東京外国語大学教授)



書の現代の部の執筆者セミナーのために、ハーバード大学でアメリカの一流の中国専門家たちと議論する機会があった。ところが彼らの間には中国の変化に対する過小評価があり、中国が台湾問題で対米強硬姿勢をとっているのも中国内部がうまくいっていないからだとみている。だから中ソが和解するという人は少なく、あっても限定和解というのが一般論だ。日本でも政府、外務省の見方は同様である。しかし、それは違うのではないかというのが私の見方である。

行き詰まった米中関係

1970年代の中国、すなわち毛・周時代の中国が示したような対米・対日戦略とは、現在の中国の戦略は大きく変化している。それは台湾問題についての対米強硬姿勢や日本の教科書問題への厳しい対応にハッキリと表れている。これまで中国は日本の防衛、安全保障問題に関して

は異議は唱えなかった。むしろソ連をけん制する狙いから、日本の防衛力増強を歓迎していた面もある。ところが今回の中曽根首相の訪韓には厳しい態度で臨んでいる。日米韓の関係強化との見方を中国はとっている。同様にアメリカへの武器技術供与に対しても厳しい批判を浴びせている。日本は二階堂自民党幹事長を訪中させて理解を求めようとしているが、それでは収まらないだろう。中国は中曽根的政権には厳しくなっている。

南北朝鮮のクロス承認については、昨年、私が中国の首脳の一りに確認したところでは、中国は賛成できないという立場である。韓国は北朝鮮のハナをあかしてやろうとの思惑から、クロス承認を歓迎している。それに対し、北朝鮮は南北統一という国是に反するとの立場から、クロス承認には反対を表明している。昨年の中国、北朝鮮首脳相互訪問で既にクロス承認の問題は話題にのぼっていた。中国は北朝鮮の立場を尊重するだろう。そういうことからすると、米中関係は行き詰まったとみていい。

では今後の米中関係はどうなるかという点、今回のシュルツ訪中は今期レーガン政権にとって、米中関係を改善する最後のチャンスだったといえる。レーガンは大統領選挙に際し、台湾との関係をかつてのように格上げするというリップサービスを行った。レーガン個人も反北京、親台湾観の持ち主である。レーガンの中国観は中国研究者のリチャード・ウォーカー氏のそれに影響を大きく受けている。リチャード・ウォーカーはレーガンと親しい間柄だが、彼が有名なのはマッカーシー旋風が吹き荒れたときにマッカーラン委員会の証人になり、赤狩りの先頭に立ったことだ。レーガンはサウス・カロライナ大学教授だったウォーカーを駐韓大使に送り込んでいる。次の大統領選挙が近づいてくるにつれ、レーガンは親台湾色を再び鮮明にしてくるだろう。趙首相の訪米も年内はない。来年は米大統領選挙の年である。米中関係の打開は望めない。

では中国をめぐる国際環境がこのように変化している根本は何だろうか。私が今の中国政治をどうみているかという点、毛沢東政治が完全に否定されたということだ。非毛沢東化の意味こそが問題である。その前に毛沢東モデル、別の言い方では中国モデルとは、50年代後半から文化大革命に至る路線をいう。毛沢東モデルのシンボル、人民公社も今や解体過程に入っている。非毛沢東化が進んでいることは、論理的帰結として中ソ関係は50年代の中ソ和解時代に回帰すると考えるのが自然だろう。

今や中国では劉少奇、鄧小平の実権派路線が完全に復活している。劉・鄧路線は毛沢東が打倒を目指した、毛沢東とは水と油の関係にある。鄧小平はエースの胡耀邦を党の総書記に据えた。主席ではないことは注目すべきである。中国共産党は82年9月の第12回党大会で、書記局を中心とした赤い貴族たちが実権を握ったといえる。余談になるが、アンドロポフがブレジネフの後継者になれたのは、昨年5月の時点でソ連秘密警察(KGB)議長から書記局員に就任していたことが大きい。書記局員は政治局員より実質的な権限は大きいのである。

その中国共産党書記局は3つの人脈から構成されている。まず胡耀邦のような共産主義青年団の出身者。共産主義青年団は中国共産党の外郭団体だが、文化大革命下では消えていた。呉学謙外相も同じである。第2は劉少奇グループの中で文革ではもっとも激しく批判された「黒い一味」陳丕顯や楊尚昆といった人々たちである。第3の人脈は非林彪系の軍人である。第12回党大会を日本の新聞は、鄧小平体制は未確立と書いた。華国鋒らの抵抗に合ったとの見方である。しかし、私は情勢は鄧小平の満足する方向に動いていると判断している。華国鋒は平の中央委員に格下げされた。これはナンバー1の地位から200番以下に下がったことになる。汪東興は中央委員候補の末席となったが、これはナンバー4から346番目への後退である。鄧小平の文革派への復讐、みせしめといってよい。鄧小平は次の段階として非毛沢東化を党中央の

段階から中国全土に拡大する考えである。鄧小平、胡耀邦、万里らが今後の鍵を握っている。

カリスマ支配から官僚支配へ

もうひとつ注目すべきなのは胡啓立である。現体制が続くとやがて次代を担う人物である。やはり共産主義青年団の出身で、北京大学の学生運動のリーダーとして文革が始まるまで中国全学連の委員長を務めていた。長い間、行方不明だったのが、最近復活し、書記局に入った。しかも胡啓立はまだ53歳の若さである。70歳代が当たり前という老人支配の中国ではきわめて若い。ついこのあいだひさびさに開かれた共産主義青年団の全国大会で基調報告をしたのは胡啓立である。なぜ私が胡啓立に注目するかというと、出てくるべき人が出てきたと感じるからである。

つまり中国政治は、M・ウェーバーの言うカリスマ型支配から官僚型支配の時代が変わりつつあるといえる。そういう意味ではもうあと戻りしないだろう。よりオーソドックスな社会主義に戻りつつある。日本の一部財界人が期待したような、中国が日本の社会に学び、資本主義的要素を取り入れて、共産主義体制から離脱していくことはあり得ない。文明論的には私は社会主義は中国に根付かないだろうと思うが、今はもう1度、鄧小平らの赤い貴族たちが中国社会を担い始めている時代である。

この過程で周恩来の業績への問い直しも始まっている。周恩来は毛沢東と劉少奇の間の調整者としての役割を果たそうとした人である。中国では毛沢東は偉大な政治家だったが、晩年に政治を私物化したと批判されている。しかしながら周総理はいつも民衆のために骨を折ったと評価を受けていた。つい2、3年前までは北京放送は夜ごと、周恩来を讃(たた)える詩を流していたほどである。

中国の重要な政治過程は78年の三中全会、81年の六中全会、そして82年9月の第12回党大会であり、これが非毛沢東化のプロセスといえる。76年の北京政変から三中全会までは華国鋒

体制化で毛沢東的要素と鄧小平的要素が併立していた過渡期である。それが三中全会で鄧小平体制が確立し、胡耀邦が復活した。経済面でいえば陳雲のような縮小均衡型の、50年代前半のソ連モデルに近い人たちが復活した。六中全会では華国鋒を引きずり降ろすとともに、党中央における非毛沢東化を文書で確認した。第12回党大会ではそのことを人事面、党規約面でハッキリさせた。

そういう非毛沢東化が進んだことが周恩来の評価の問い直しの背景にある。文革が中国社会を混乱させた悲劇であるとすれば、首相の地位にあった周恩来はなぜ毛沢東にかけたのかということになる。私は66年11月に北京の人民大会堂で開かれた孫文生誕100周年記念式典に出席したことがある。国家主席の劉少奇や鄧小平らは全く注目されず、大会堂の周囲は紅衛兵が取り囲み、これが文革かと思われた。そこで周恩来が演説し、革命家は孫文のように晩節を全うしなければならないと話したあと、晩節に毛沢東に背く輩がいると劉少奇らを暗に批判した。そして毛主席万歳を唱えてしきりに毛沢東を讚美した。

実をいえば私の持っていた周恩来像はそのとき、崩壊してしまった。周恩来は案外、軽い人ではないかと感じたのだ。劉少奇はそのときに公衆の前に姿を現した最後だったが、その周恩来の言葉を聞いて顔面そう白となった。一方、鄧小平はというと、今にみているという感じで周恩来をにらみつけていた。いふなればいまや鄧小平の復讐が実現したといっている。周恩来は最後には毛沢東政治の非に気づき、毛沢東体制下の非毛沢東化を進めようとした。その点では鄧小平と一致する。しかし、時代が大きく変わっただけに、今や周恩来には△印がついている。葉劍英、李先念といった周恩来系列の人は地位が低下している。ここまでは、毛沢東と劉・鄧実権派の確執で説明がつく。

親フルシチョフ派の復活

劉少奇、鄧小平は大躍進政策が失敗に終わっ

たあと実権を握ったのだが、それ以前から毛沢東モデルを批判していた人物がいた。彭徳懐である。彭徳懐は「大躍進」政策や人民公社、さらには軍の近代化をめぐって、毛沢東と全面的に対立した当時の国防相であった。朝鮮戦争の司令官でもあった。59年8月の廬山会議で毛の人民公社、大躍進政策について農村が目茶苦茶になるといさめた。全面対決の結果、彭は失脚した。

その彭徳懐が今日、単に名誉を回復したのみならず、毛沢東に敢然と立ち向かった英雄として人気が高まっている。あの毛沢東選集を発行した人民出版社からは「彭徳懐自伝」(81年12月)も出版され、ベストセラーになっている。もしも中国の政治家の人気投票がいま実施されたら、彭徳懐がトップになるのは間違いない。そもそも文革の発端は、劉少奇路線の北京知識人が、暴君をいさめた明代の清官・海瑞に託して彭徳懐の復権をもくろんだ新編歴史劇「海瑞罷官」(吳晗作)への姚文元の批判にあっただけに、その意味するところはきわめて大きい。

その彭徳懐は中国のフルシチョフといつてよい。軍の近代化でもソ連モデルでいくべきだと主張した人である。つまり劉少奇路線と彭徳懐路線の提携により、対ソ認識の転換が行われているのである。既に中国内部には非毛沢東化に伴ってフルシチョフ路線が完全に復権しているともいえよう。彭徳懐系の張愛萍が国防部長に就任するなど彭徳懐系の人々も復活している。

親ソ派の高崗派の復活

さらに印象的なことは高崗派の人々の復活である。高崗は日本が敗戦で撤退したあとソ連の支援の下に東北中国に地盤を固めた人物である。「東北王」とも呼ばれる。中国革命に功のあったことでは、毛沢東、周恩来、劉少奇、そして高崗の順番になるくらいである。毛沢東が長征で延安に根拠地をもてたのも高崗が東北中国を固めていたからである。だから毛沢東に感謝されていたほどである。49年の中華人民共和国の成立時には、中央人民政府副主席としてナ

ンバー4の地位にあった。ところが高崗は國務院総理などもっと高い地位を望んだのだが、それは成らなかった。このため、ソ連の支援の下に東北中国を固め、北京政府とは独自に動き、スターリンとの間に通商貿易協定を結ぶなどした。

当時のスターリンの政策はポーランドを衛星国化したことと同じことを極東でも考えていた。北朝鮮には金日成を送り込んだ。ところが毛沢東はスターリンにとっては煙たい存在だった。そこで建国時のどさくさにまぎれて、ハルビンに李立三を送り込んだ。李立三は30年代に李立三時代を築いたほどの人だ。しかし、李立三は地元からの支援がななくうまくいかなかった。王明による工作も効果が上がらなかった。そこで高崗の利用に走ったわけである。高崗は親ソ派スターリン主義者といつてよいだろう。

高崗による東北中国の支配は中国共産党にとっては文革に匹敵するほど深刻な問題だった。そこで54年には高崗を逮捕、摘発に走り、これにより高崗は失脚していく。その高崗には東北人民政府の要職についていた部下がいたが、彼らが一斉に第12回党大会前後に復活している。例えば郭峰は昨年秋から東北中国の中心の遼寧省の最高指導者である党第一書記に復活している。中ソ関係でいちばん大事なところはソ連に接している黒竜江省である。その黒竜江省の代表(同省全国人民代表大会常務委員会主任)を務めるのは、同じく当時、中共中央東北局農村工作部長だった趙德尊である。まぎれもない親ソ派スターリン主義者だった高崗一派の旧幹部が、いま全面的に復活し、しかも実力者になっていることは驚くべきことであり、毛時代には考えられなかったことである。

ではそれが対ソ関係とどう結び付いているかというと、78年に三中全会有り、79年あたりから中ソ関係は裏側で徐々に変化しつつある。対ソ関係の改善が目立ち始めたのである。具体的には中国は防空ごうを掘らなくなったし、通商貿易交渉やウスリー川の河川通行交渉も始まった。それまでソ連のことは社会帝国主義と非難していたのが、79年には黒竜江省が真っ先に「ソ連は社会主義国である」と言い始めた。こ

うみてくると中国の内部の潮流が変化してきているといわざるを得ない。日本やアメリカからより多くの援助を引き出すためにソ連カードを使うというのであればパワーゲームにすぎないが、中国の内在的な変化であれば、日本やアメリカがどう働きかけようとするしようもない。確かに中国は日本からのプラントや資本の導入をしなくなっている。日本が有利な条件で提供している円借款も使い切れていない。中国はポーランド問題を教訓的に受け止めている。西側の援助に頼りすぎたために経済の破綻（たん）を招き、「連帯」という反革命分子の跳梁（りょう）をもたらしただけというのが中国の見方だ。

「連帯」は本質的な踏み絵

中国がポーランドの「連帯」を支援しなかったことは留意すべきである。「連帯」はレーガン政権にも日本にも支援を求めてきたほど悲鳴をあげていた。ところが鄧小平、胡耀邦体制下の中国は、その「連帯」を弾圧しているヤルゼルスキー政権と通商協定を結んだのである。中国は中国内部でのポーランド化現象は許すことができないと判断したわけだ。中国がポーランドの「連帯」を結構なことだと認めていたら、中ソ和解はあり得ないのだが、そうはならなかった。いわば「連帯」を認めるかどうかは中国にとって本質的な「踏み絵」だといっている。「連帯」つぶしという点では中ソは一致した点であり、まさに中ソ同盟である。問題になってくるのは、中国が日本の防衛力の増強、日米関係の強化、北方領土問題についてどう反応してくるかということだろう。北方領土問題に対してはこれまで返還要求は大いに結構といっていたのが、最近は何も言わなくなっている。

もうひとつ中国の変化を表すことに、アメリカの武器援助の申し出に乗ってこないことがある。今回のシュルツ訪中でも、その前のヘイグ訪中でも、アメリカは武器援助を申し出ている。特に今回は台湾にFXのデリバリーが始まりつつあるという情勢下での申し入れである。中国が本当に反覇権主義、対ソ強硬姿勢堅持な

らこの申し入れに乗ってくるはずである。米中関係でも極限的なテストは既に終わっているといえる。

経済面でもソ連経済に対する評価が中国内部で出始めている。ソ連は5カ年計画が順調、ソ連にはインフレがない、といった評価である。われわれからみればソ連経済はガタついているし、ソ連と一緒にやるより日本とやる方がいいと思う。ところがそれは西側の物差しで見ているだけである。経済力に格段の差がある日本と一緒にやれば壊れるのは中国経済である。中国は人口の80%が農民で、それでもなお食糧が自給できない農業国である。ちょっと経済システムをいじれば良くなるということにはならない。中国は社会主義の国であり、社会主義イデオロギーを持っているということを日本は無視していたのではないか。日本の思い上がりはどこかにあったともいえる。また、中国社会の深い所をつかんでいなかったこともある。

そうしてみると中国、ソ連、モンゴルの社会システムがよく似ていることに気付く。汽車は時間通りにこないし、飛行機は遅れっ放し、ホテルの湯がちゃんと出ないといった社会の非効率さはよく似ている。いわば社会主義の共通性がある。

ロシア語世代の台頭

中国内部の変化でもう1つ注目すべきことは、50年代の中ソ友好時代に育ち、ロシア語をよくする人たちがハッスルし始めていることだ。例えば中国外務省の銭其琛次官がそうだ。彼は中国外務省きってのソ連通であり、「ロシア・サービス」として長いモスクワ在勤の経験もある。銭其琛の名が注目されたのは、57年3月にブレジネフ書記長による対中和解への呼び掛け（タシケント演説）があったが、それに対し、新聞局長の銭が中国政府スポークスマンとして「留意してソ連の実際行動を見る」旨の発言をしたことだ。しかも銭其琛はブレジネフ提案の概要を新華社を通じて全中国に報道し、その全文を幹部用の内部新聞「参考消息」に掲載

した。

そのブレジネフ提案は実によくできていた。中国が応じざるを得なくなるような内容だった。具体的には国境の兵力引き離しは無条件で話し合いたいとし、中ソ間に国境確定問題があることを認めた。日本の北方領土返還要求に対する姿勢とは大違いだ。また、2つの中国についても認めていないと強調している。私はそのブレジネフ提案を読んで、なるほどと思った箇所がある。それは言外に2つの点で中国に感謝していることだ。1つは鄧小平さん、よくやった、よくぞ毛沢東をやっつけてくれたということ。もう1つはポーランドの「連帯」を中国が支援しなかったことに対してだ。このことは82年1月の日ソ事務レベル会議でもソ連はもらしていた。

銭其琛は82年5月に外務次官に昇進するとともに、9月の党大会では外務官僚としては異例のことだが党中央のポジションを得ている。ブレジネフ提案に対する銭其琛の対応が中国首脳の同意を得ていたことを示している。もう1人、前ソ連東欧局長の于洪亮がいる。82年夏に日本が教科書問題で大騒ぎしているころ、ひそかにモスクワを訪問し、その秋の銭其琛とイリイチョフソ連次官の会談の下準備をしたのであ

る。教科書問題で日本を批判したのは、中国の世界戦略が転換過程にあったからであり、これまでも世界戦略の転換時には日本を批判していた。

この3月からはイリイチョフに代わりカービッツァが外務次官として出てくるが、この人がブレジネフ提案の実際の筆をとった人であろう。もう1人ソ連外務省の顧問でチフビンスキーという中国問題の研究家がいる。2人はともにモスクワ大学の教授である。2人とも鄧小平ら実権派に対するシンパシーが非常に強い。それが鄧小平が実権を握ったのだから、80年代の中ソ関係はかなりの焦点になることは間違いない。それはシベリア開発に中国の労働力が活用されるといったことになるかもしれない。ソ連は世界戦略のために年間200億米ドルを注ぎ込みながら、キューバ、ベトナムなどに全面的には信頼されていない。それだけにソ連は中国との関係を改善し、同じ社会主義の共通の基盤に立って行動できれば威信も増大すると考えるだろう。中ソ対立を前提とした中国観は根本的に見直さなければならないだろう。

(1983.2.10 大阪支所 担当 大石卓樹、この原稿は講師のチェックを受けました)